

Ⅱ. 教育イベント実施報告



▲ 「かながわ人づくりコラボ 2019」会場にて
かもえもんと SDGs ダーツ

かながわ教育月間に関わる取組みの詳細は県教育委員会ホームページをご覧ください。
(https://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/gekkan/gekkan_top.html)

概要

掲載イベントについて

■ かながわ人づくりコラボ 2019

かながわ人づくり推進ネットワークが県教育委員会と共催で開催している教育イベントです。

■ ネットワークによるオススメ教育イベント

幹事・協力団体代表者が参加した教育イベントの中で皆様に紹介したいものです。

■ 各種団体によるイベント

かながわ人づくり推進ネットワーク参加団体（民間団体）、市町村教育委員会・県教育委員会、県立学校から報告いただいた教育イベントです。

■ （コラム）企業等における家庭教育支援の取組み

(1) かながわ人づくりコラボ2019

「かながわ人づくりコラボ」は「かながわ教育ビジョン」の理念の実現に向け、県民の皆様との協働・連携を進めるため、これからの人づくりについて皆で考える場として「かながわ教育月間」にあわせて開催する教育イベントです。

実施概要

主 催 神奈川県教育委員会
かながわ人づくり推進ネットワーク
場 所 横浜市西公会堂
開催日時 11月2日(土) 13:00～16:00
参加者数 306名



▲ ボッチャ体験



司会の様子▲

(県立小田原東高等学校放送部黒澤さん、尾野さん)

教育イベント概要

テーマ

スポーツを通して個性を認め合う人づくり ～学校現場の活動から～

開催内容（プログラム）

(1) 開会のあいさつ



(神奈川県教育委員会 教育長 桐谷 次郎)

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく「心ふれあう しなやかな 人づくり」の取組、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点やかながわ教育ビジョン一部改定の話があった。

また、「ともに生きる社会かながわ憲章」の取組について、話があった。

(2) 講演「オリンピックを目指して得られたもの～五輪メダリストからのメッセージ～」



(日本体育大学教授 東京都体育協会会長 山本 博)

現役のアーチェリー選手として 45 年間続けている選手生活と、オリンピックでメダル獲得をめざす中での経験及び高校教諭から大学教授の現在の立場から教育者の視点での経験を基に講演をすすめて行く。

アーチェリーを始めたのは中学1年生からで、大学3年生の時にはじめて出場したロサンゼルスオリンピックで銅メダルを獲得した。57 歳になる現在においても、東京オリンピック出場に向けて選手生活を続けており、11月12日から14日にかけて行われる1次選考会に参加できる16名にエントリーされた。本日も午前中は練習をしてきておりこの後、練習場に戻り練習を再開する。

午前中はきつめの練習をしてきており、練習を再開する頃には、体もよい状態になっていると思う。これも、45年間の競技生活で培った経験からである。

オリンピックという世界の頂点をめざしているときに、勉強の頂点をめざさないということは、あまりにも都合の良い話である。スポーツでトップをめざすならば学業でもトップをめざすハートを持たなければならない。日本は文武両道という言葉があるが、文武分業になっている。アメリカでは、トップレベルの大学からオリンピック選手を多く輩出している。学業とスポーツの両立を国の方針として進めてきている経緯がある。日本でも、大学スポーツ協会ができ、大学生の勉学とスポーツの両立をサポートする体制ができた。

また、4年に1度開催されるオリンピックは選手としてはとても厳しい長さである。そのため、メダルをめざして必死に取り組み、挫折も大きく涙を流す選手も多い。オリンピックに出場する選手は、誰にも負けない綿密な準備とその競技のことを知り尽くしてなければいけない。私はアーチェリーのことは何でも答えられる自負がある。そして、綿密な準備はもちろんのこと、競技本番のときに、どれだけ大胆になれるかがポイントである。準備ができていない人の大胆は無謀になるだけである。

主体的に競技に向かう気持ちを見極めることが大事である。常に選手として見極めるようにしている。勉強もスポーツも目標を達成したらそこでストップしてしまうのではなく、何のためにやっているのか、自ら取り組む目的が重要であり、あるステージの満足を得ても次に進んでいくことが大事だ。私が競技を続けている目的は、未だにできないことをできるようにしたいからである。だからアーチェリーを続けている。そうしたことから、体育の教員として、子どもたちには、できないことができるようになる経験を提供すること、かっこよく言えば、不可能を可能にする経験をさせることが大事だと思っている。そのためにも、バランスよくより多くのことに挑戦してほしい。

(会場からの質問①)

一人ひとり価値観や個性が違う中、自分のベストをめざしたり自分が幸せだなと感じていればよいと思うのだが、なぜ一番をめざす必要があるのか。

(回答①)

頂点をめざしている道のりを経験していく中で、他者に自分の行動を通して何かを伝えることができ、他者との比較を超越できる。7番8番では、他者との比較になる。人の能力は無限であり、一番というのは常に永遠である。どのスポーツも学問も将来にわたっても、今が最高かどうかはまったく保証されるものではないので、頂点をめざし続けることが大事だと思う



(会場からの質問②)

子どもが山本先生の講演を聞きたくて来た。保護者が代わりに質問をする。子どもがアーチェリーをしているが、長く怪我をせず続けるためにはどうしたらよいか。小学校3年生にもわかるように教えてほしい。

(回答②)

道具が体に合っているものかどうかはまず重要。またアーチェリーは、左と右の腕の使い方が違う。人間の体は左右対称なので子どもの頃に、アーチェリーの他、かけっこや水泳なども並行してやると怪我をする可能性が低くなる。あと5分でも10分でも勉強を行うこと。そして得意なことをがんばること。日本は、どちらかというと不得意なことを頑張らせるが、得意なことをがんばることによって、辛いことも取り組もうという意欲がでてくる。

(3) かながわ教育ビジョン一部改定について

(神奈川県教育委員会 教育局長 田中 和久)



国の「第3期教育振興基本計画」の閣議決定や、本県の総合計画である「グランドデザイン第3期実施計画」の策定などを踏まえ、かながわ人づくり推進ネットワークからの提言も参考に、令和元年10月に一部改定した「かながわ教育ビジョン」について、第5章「重点的な取組み」を中心に、その概要の説明を行った。

(4) 教育論議（実践紹介を含む）

①実践紹介（県立保土ヶ谷養護学校 教頭 井上 浩子、教諭 相川 由宇）



近隣学校（権太坂小学校、境木中学校、光陵高校）とのスポーツを通じた交流について井上教頭より発表。あわせて、4年目の取組であるパラスポーツプロジェクトのプロジェクトリーダーの相川教諭より、プロジェクトイベントの取組内容についてスライド及び映像を使用し発表を行った。

②実践紹介（県立秦野総合高等学校 教諭 盛 健志）



総合学科2年生、3年生の芸術スポーツ系列科目「スポーツマネジメント理論Ⅰ・Ⅱ」「スポーツマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」の授業で生徒が企画・運営やボランティアとして参加するスポーツイベント（南が丘小学校、秦野市内特別支援級の児童・生徒、秦野市高齢者対象のイベント等）の取組についてスライドを使用し発表を行った。

③教育論議「スポーツを通して個性を認め合う人づくり～学校現場の活動から～」

「スポーツを通して個性を認め合う人づくり～学校現場の活動から～」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、実践紹介やパネリストの課題提起をもとに教育論議が行われた。

(主な意見および感想)

- 山本氏の講演の中で「出来るということはいろんなことができる、できるようになっている、喜びを実感することなのだ。」という話があったが、2校の実践紹介を聞いてこの話のことを感じた。
- 共生社会という視点では、スポーツをツールに交流するというのは比較的入りやすいと感じた。また、ボッチャは重度の障がい者にもできるスポーツであり、初心者でも取り組みやすく、ライフスポーツとして継続できるメリットがある。
- 秦野総合高校は、再編・統合前の秦野南が丘高校の時、すでに近隣学校や市と連携・協力ができていたが、それがうまく現在にも繋がっていると思った。



- ・ 保土ヶ谷養護学校の周りは、もともと恵まれた交流環境であり、小学校、中学校、高校があるという利点を今後も生かしていきたい。4年間の取組を、終わらせるわけにはいかないと思っている。また、オリンピック開催に関係なく、共生社会の実現に向けて、今後進めていく必要性を感じている。また、未就学児にもパラスポーツに参加することを広げたい。



- ・ 授業交流では、あまり光陵高校の生徒とは話せなかったが、もっとスポーツ交流やイベントを増やしたら会話などが弾むので、こうした取組を増やしていった方が良いと思う。
- ・ スポーツを通しての交流事業の難しさは、なるべく生徒に任せなければならない。また、任せ方が重要であり、教員がどれくらいの範囲でサポートし、できる限り生徒を信頼して任せることがとても重要だと思う。その線引きの難しさを感じている。そうした中であっても、一番大変なのは、任された生徒の側だと思う。自分たちでイベントを作り上げていく過程で責任を持ってどれだけ主体的に取り組んでいけるかが重要だと思う。

(今後に向けて)

- ・ 共生社会の実現の一環として授業で行ったが、スポーツは地域交流にとっても適していると思う。人間関係を社会的なかわりとするのであれば、そういう授業交流を通じて、何か一つ大きなものを、一緒に協力しながら作る時間は重要である。さまざまな会話をし、一つのもので作り上げる時間や作りあげた時の場の雰囲気などが、より意味のあるものになると授業交流を通じて感じた。
- ・ スポーツを通して色々なことに気づいてほしい。実践紹介にあったが、「気づく」ということは、教育界では大事だと思った。県教育委員会として子どもたちが、社会とかかわる中で思いやる力を育ててほしいと思う。また、こうした経験を通して自己肯定感も育ててほしい。
- ・ スポーツイベントを通して、子どもたちが、社会に参加するきっかけになるのではないかと。学校の中だけではなく、地域や学校とのつながりを築きながら、また違いというものを気づきながら、それをお互いに尊重し合いながら、スポーツ交流をすすめてほしい。神奈川県が進めている共生社会づくりにもつながる。

(5) 閉会のあいさつ

(かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 内藤 昌孝)



閉会のことばとして、山本氏の講演では、競技生活 46 年において三元号（昭和、平成、令和）でメダルを獲得したいという考えのもとで挑んでおり、目標に達するために自己分析をし、綿密な準備をされている。競技生活の中で山本氏の哲学が生み出され、さまざまな人に通じる理念である。

教育論議では、スポーツの可能性や理念の話、そしてスポーツによる充実感、達成感それから負けるときの悔しさということも大事であるとの話があった。

また、かながわ教育ビジョン一部改定に掲げた理念の実現に向け県教育委員会と、かながわ人づくり推進ネットワークが両輪となって、この人づくりコラボの場を活用しながら、県民の皆様と共に共感、協働、連携をはかりたいとの話があった。

(2) ネットワークによるオススの教育イベント①

1 令和元年度 第1回市民公開講座

【演 題】 健康を維持する『ホルモン』

【講 師】 漢方薬学科 薬品反応学研究室

教 授 波多江 典之（はたえ のりゆき）

【期 日】 令和元年10月5日（土）

【会 場】 横浜薬科大学 講義室

【内 容】

健康を維持する「ホルモン」について、最初にホルモンとは何か、次いでホルモンが関与する病気とその治療薬について、骨粗鬆症を例に講演いたしました。

住んでいる場所や地域によって、ヒトを取り巻く環境は様々な変化します。神奈川県庁所在地である横浜市では、2018年の最高気温が、36度を超えた猛暑日もあれば、冬には5度にも満たない日もありました。外気温など、環境の変化に適応するためにヒトが持っている仕組みの一つがホルモンです。ホルモンとは、ヒトの身体のなかで多くの機能を制御している生理活性物質の総称です。ホルモンには、体温を調節するホルモンや、血糖値を調節するホルモン、体内の水分量を調節するホルモンなど、さまざまなものがあります。

これらホルモンは、全身に運ばれて作用するため、生命活動の根幹に関わる機能の制御に多く用いられます。このため、適切な量のホルモンが産生されると健康は維持されますが、ホルモンバランスが崩れると病気を発症しやすくなります。健康維持において、ホルモンは不可欠な物質の一つといえます。

関節リウマチや全身性エリテマトーデス（SLE）、骨粗鬆症など、過剰な免疫応答を引き起こす自己免疫疾患は、女性に発症しやすい病気であることが知られています。このため、これらの病気には、女性ホルモンの関与が考えられています。中でも、骨粗鬆症は、閉経後の女性に多く診られる病気です。ヒトの骨は、骨の破壊と形成が絶え間なく繰り返されており、常に新しい骨に造りかえられています。女性ホルモンは、この骨の新生に関与いたします。閉経により、女性ホルモンの量が減少すると、骨の破壊が過剰になるため、骨粗鬆症を発症しやすくなります。そこで、女性ホルモンのような作用をもつ骨粗鬆症のお薬が開発されました。

健康維持に欠かせないホルモンは、病気の治療にも多く用いられています。これらホルモン関連のお薬は、強力な効能が期待できますが、誤った使い方をすると、人体に有害となる「諸刃の剣」的に作用します。

講演後の質疑応答では、他のお薬にも共通することですが、医師や薬剤師と相談して、適切に服用することの重要性について説明いたしました。



講師 波多江教授



参加者の皆さん



質疑応答の様子

2 横浜薬科大学の主な教育イベント

【市民公開講座】

市民の皆さんの健康の維持・増進を目的に身近な「医療」「薬」「食」に関する講座を開講しています。

開始年度：2006 年度

対 象：一般の方

実 績（2019 年 12 月の時点）

：累計 37 回、延べ約 5700 人が参加

テーマ例：～食の安全・安心～

～風邪と漢方薬～

～個別化医療ってなに？～



【歩こう会】

地域住民の健康の維持・増進及び本学学生との相互交流を目的に大学周辺をウォーキングしています。

開始年度：2009 年度

対 象：一般の方

実 績（2019 年 12 月の時点）

：累計 119 回、延べ約 6000 人が参加

コース例：上級コース 約 10km

俣野別邸庭園往復

中級コース 約 7km

境川遊水地公園往復

初級コース 約 2km

俣野公園周回



3 横浜薬科大学の沿革

本学は、〈個性の伸展による人生練磨〉を建学の精神とし、明治維新の横浜港の開港を機に、薬学が発展してきたその地に平成 18 年（2006 年）に開学しました。一層、高度でより豊かな知識を有し、また、人の苦しみを理解し、共感し、慈しむ“惻隱の心”を持つ薬剤師・研究者の育成に取り組んで参りました。



横浜薬科大学
YOKOHAMA UNIVERSITY OF PHARMACY

神奈川工科大学の取組み

1. ロボットプログラムスペシャル講座（教育月間イベント）

【タイトル】 ロボットプログラムスペシャル講座

【講 師】 神奈川工科大学 創造工学部
ホームエレクトロニクス開発学科
教授 金井 徳兼



【開催日】 2019年10月19日（土）

【参加対象】 1 限目 小学1年生～3年生 （導入編講座）（定員 10 名）
2 限目 小学4年生～高校生 （応用編講座）（定員 10 名）
3 限目 指導者教員向け （入門編講座）（定員 10 名）

【会 場】 神奈川県立青少年センター（横浜市緑区紅葉ヶ丘 9-1）

2020 年度より小学校においてプログラミング教育が導入されることを受け、各地域では各授業科目と連携した取り組みや学習環境の整備が進められています。本講座は、児童を対象にロボットを活用したプログラミング体験学習と小学校教員向けプログラミング学習に関する研修を目的に開講しました。両講座ともレゴエデュケーション社製 レゴ マインドストーム EV3 と iPad を使用しました。



（*1 プログラム画面）

小学生を対象とした学習体験では、コンピュータの役割、プログラム^{*1}とは何か？の理解後、iPad をもちいてアイコンを組み合わせる方式でプログラミングを体験しました。アイコンを並べた順番でロボットの動きが決まること、壁にぶつかったことを検出するセンサーを活用することで、ある条件の成立でロボットの

動作が変わること、さらに順序や条件などのプログラミングの基本処理を理解しました。子供たちは、自分が作ったらプログラムによってロボットの動作が変わること、プログラム内の命令順序や条件の設定を間違えるとやりたいことができなくなることから、ロボットの動きのあらすじを正しくつくり、プログラミングすること、論理的に考えることの大切さを体験しました。

教員向けの研修講座においては、プログラムの基本処理の理解後、LEGOマインドストーム^{*2}教材の授業使用前の準備、基本的な使用方法を体験しました。講師が実践した愛川町内の小学校でのプログラミング学習の事例をもとに、児童たちの取り組み、課題の設定などを含めて実習を通して研修を進めました。



（*2 LEGO マインドストーム）

参加された先生方からは、小学校でのプログラミング教材の選定や学習環境の整備、具体的な教材の活用方法を実践的に体験され、講座内容をもとに今後の各学校でのプログラミング教育に取り組まれないとの声がありました。



(小学1年生～3年生)



(小学4年生～高校生)



(指導者教員)

2. その他、地域対象の主な教育イベント

神奈川工科大学では、理科好きの幼児・児童・生徒が増えることを目的に、地域の方を対象にした様々な教育イベントを開催しています。その中の3つを紹介します。いずれも、親御さんの見学は可能で、楽しく「ものづくり」を体験できます。

(1) ものづくり夢体験

【開催日】2019年7月13日(土)、27日(土)

【参加対象】小学4・5・6年生

【会場】神奈川工科大学 KAIT工房

ものづくりを通して楽しさを、そして、作品の完成で達成感を味わおう！
会場は本学のKAIT工房となり、体験コースは次の3つを用意しました。

- ①手作りで時計を作ろう
- ②コインケースを作ろう
- ③ソーラー飛行機&マイグラスを作ろう

当日は、総勢30名の児童がものづくりを体験しました。



(2) ペットボトルロケット&ペーパー・プレーン競技大会

【開催日】2019年7月28日(日)

【参加対象】小学生、中学生、高校生

【会場】神奈川工科大学 KAIT スタジアム

みんなで大空に向かってロケットや飛行機を飛ばそう！
工学部機械工学科が主催するイベントで、「ペットボトルロケット&ペーパー・プレーン競技大会」を開催しました。

会場は、大学の野球場となるKAITスタジアムで、当日は、小学生中心に12名が参加しました。

この日は、高校生を対象としたオープンキャンパスも同時開催しており、多くの高校生も見学していました。



(3) クリスマスイベント「ブロックで未来都市をつくろう」

【開催日】2019年12月14日(土)

【参加対象】幼児年中～小学5年生

【会場】神奈川工科大学 第1食堂

理科好きっ子たちが、未来都市をブロックで表現！

親子で一緒に、明るい未来を思い浮かべながら、ブロックで未来都市を創作しました。

イベントは、午前の部と午後の部の2回実施し、各回75組、合計で保護者等を入れて400名以上の方が参加し、「ものづくり」の楽しさを体験してもらいました。



「NPO教育かながわフォーラム講演会」

演 題 古代の歴史散策 –ヤマトタケルの東征とその後–

【講演日時】2019年10月20日(日)

郷土史研究家 三嶽嘉保氏、古代のロマンを語る!

【場 所】伊勢原市シティプラザ及び伊勢原市周辺

【講 師】三嶽嘉保(NPO教育かながわフォーラム客員会員)

【主 催】NPO教育かながわフォーラム

【後 援】神奈川県教育委員会、伊勢原市教育委員会、伊勢原市観光協会

【講演内容】

1. 「古事記」に依れば景行天皇の御代、倭建命による東征が行われた。その際、相模国造が偽って倭建命を火攻めにした。倭建命は草薙剣で枯れ草を薙ぎ向火を点けて、かろうじて脱出し相模国造を亡ぼした。この事件は「日本書紀」に依れば、静岡県焼津で起きたとされている。しかし、存亡をかけた戦いを相模国造が本拠地を離れ、わざわざ焼津まで遠征し戦ったとは到底考えられない。それでは相模国のどこで起こったのかは論争のあるところであるが、主に以下の理由により、伊勢原市の駒形山(伊勢原駅付近)で起こったと思われる。

- (1) 伊勢原市の駒形山は、倭建命を祭神とする御嶽神社の分布(倭建命の足跡を示す)状況から見て、倭建命と相模国造が対決した場所と考えられる。
- (2) 「駒形」の地名は事件の真相を示す場所の意である。

古くからある「やまとことば」の多くは、別の言葉の一部を組み合わせで出来ている。それ故、言の葉(言葉の端の意)と言う。この造語法は生活語などの基礎語に限らず、地名にも見られる。

”こまがた(駒形)” = “こと(事)” + ”まこと(真)” + ”がた(形見、跡形の形)”

- (3) 弟橘姫の辞世の歌の「さねさし」とは、山(ここでは大山のこと)が美しく見える半島と云う意味であり、駒形山の近くに半島状の地形がある。



さねさし 相模の^{おの}小野に 燃ゆる火の^{ほなか}火中に立ちて 問ひし君はも (弟橘姫の辞世の歌)

“さねさし” = “さ(美称、^{さゆり}小百合、^{さよ}小夜などの「さ」)” + “ね(^ね峰)” + “さし(^{さし}砂嘴、半島)”

- (4) その半島状の地に比較的大きな倭建命を祭神とする池端御嶽神社(池端の鎮守)がある。
- (5) その地を池端と云い、対岸を沼目と云う。古事記の記述通り、大沼があったと考えられる。
- (6) 冬の季節、「^{おおやま}大山おろし」の風が吹くと半島状の地形は三方が海で火攻めに最適な地である。
2. 「古事記」に依れば、相模国造を滅ぼした地を焼遣と名付けたとある。だが、相模国には焼遣という地名が無かった為、「日本書紀」では静岡県焼津のこととしたものと思われる。しかし、伊勢原市には木津根という変わった地名がある。この地名は焼遣という不吉な名を嫌った地元の人々により、次のように変えられたものと考えられる。
- “やきつ”(焼遣)⇒“やきつ”(焼遣)+“ね(^ね根、湿った土地)”⇒“やきつね”⇒“きつね”したがって、焼遣の地名は伊勢原市に現在も変化した形で残っていることになる。
3. この木津根の近くに丸島駒形神社がある。駒形神社は奥州に多く、坂上田村麻呂と蝦夷との戦いの場所に建てられたと考えられる。丸島駒形神社は、倭建命が勝利の記念として建てたもので、後に坂上田村麻呂がこの故事に倣い、蝦夷との戦いの都度、多くの駒形神社を建てていったものと考えられる。
4. 伊勢原市には倭建命に因んだ「^{ちな}みたけ」、「^{ひがしおおだけ}東大竹」などの地名があり、その他状況証拠が多数ある。

【講演と散策の様子】

講演終了後、マイクロバスにて関連の史跡を散策した。



参加者の主な感想

- 伊勢原、秦野、平塚地区が古代の歴史があることをはじめて知りました。家に帰ってから資料をゆっくり読みたいと思います。
- 大変興味深く拝聴しました。前回よりさらに深く内容を理解しました。
- 三重県亀山の二つのヤマトタケルの古墳を見に行ったので懐かしかった。
- ロマンを感じるご講演をいただきました。とても楽しく聞かせていただきました。
- 語意については漢字の字源しか学んでなかったのが、今回の和意(やまごころ)に感動しました。純粋な日本文化の発生ともいえるかと・・・
- 時間に限りがあり資料の途中で終わったのが残念です。後日、後半の講演もお願いしたい。
- 伊勢原地区の歴史を知り、地名等の由来を学び親近感を持つことができた。
- 関連する史跡を歩きながらヤマトタケルノミコトはこの道を歩いたのかな、ここからあの大山を眺めたのかな、などと考えると歴史が大変身近に感じられました。教科書や歴史の書物に書かれている歴史だけが歴史ではないと実感しました。
- 今回の古代の歴史散策ですが、午前中伊勢原シティプラザでの講義は詳しく説明して頂き、また午後からの各地の散策についても引き続き講師三嶽さんの説明に感動いたしました。歴史については無頓着な私ですが、今回はいろいろと感動を受け今後は少し勉強しなくてはと勇気づけられました。今後もこういった企画をよろしくお願いします!!

NPO 教育かながわフォーラムについて

私どもの NPO は、退職した県立高校校長有志により、平成 19 年 9 月 28 日に設立され、現在、県立学校管理職経験者を中心に 63 名が会員として参加して、それぞれの得意分野を生かした活動を行っています。会員はいずれも長年の教育活動と学校経営に関わることで培った貴重な知識と経験を持っており、現職を離れた立場でその力を活かし、「かながわ人づくり推進ネットワーク」での活動をはじめ神奈川の教育を側面から支援する役割をささやかではありますが、果たしていると自負しております。

その主な活動は以下のとおりです。

○「神奈川らしいコミュニティ・スクール」学校運営協議会委員委嘱

- ・大和東高校、鶴見高校他 10 校 本会員活動中

○神奈川県福祉作文コンクール審査

- ・神奈川県社会福祉協議会・神奈川県共同募金会主催
「神奈川県福祉作文コンクール」一次審査を担当

○小中学生対象体験型理科教室

- ・講師：渡辺克己会員
- ・川崎市立西梶ヶ谷小学校出前事業
- ・平塚市立城島小学校理科教室「稲の話」
- ・平塚市城島公民館まつり
「子供理科教室」
「顕微鏡を使った理科教室」



○中高年「健康づくり教室」

- ・講師：佐々木悦子会員
- ・平塚市大神公民館
- ・平塚市城島公民館
- ・ひらつか市民活動センター



○教育相談会「高校ってどんなところ！大学ってどんなところ！」

- ・はだのこども館、
 - ・ひらつか市民活動センター
- 県立高校説明、大学・専門学校説明と個別相談
15 名の会員で運営、説明、個別相談を担当



問合せ先：NPO 法人「NPO 教育かながわフォーラム」

(<http://www.npo-ekf.com>)



「近代化遺産ツアー 1 浦賀地区」

実施概要

主 催 横須賀市自然・人文博物館
場 所 横須賀市浦賀地区
開催日時 9月27日(金) 13:00～15:30



▲ 解体される浦賀ドックの機関工場
遠方に大きく映る建物が機関工場。
令和元年度内に解体。

教育イベント概要

【開催目的】

近代化遺産ツアーは、横須賀・三浦半島に所在する近代化遺産を歩いて巡るのみならず、近代化遺産を通して都市形成過程や街の特徴について参加者とともに考えることを目的とした行事です。

令和元年度の第1回目の近代化遺産ツアーは、「近代化遺産ツアー 1 浦賀地区」と題して、横須賀市浦賀地区の歴史遺産と都市形成を考える行事を企画しました。浦賀地区は、ペリー来航の地などとして近代史上でもよくとり上げられる地域ですが、同地区には明治30年代初頭に開業し、拡張が続けられた浦賀ドックと呼ばれる造船施設も所在しておりました。この浦賀ドックは、民営によるものとしては国内でも早期の本格的なドライドックを備えた施設で、その跡地には明治から昭和時代にかけての歴史遺産が点在するなど、重要な歴史的施設として注目をされてきました。そのような中、令和元年度に機関工場などの戦前の工場建築の解体計画が同地を管理する住友重機械工業株式会社より発表され、新聞紙上などでも大きくとり上げられました。一方、令和2年（2020年）は浦賀奉行所が開設してから300周年にあたり、その前年の令和元年にも記念イベントなどが催されるなど、浦賀地区の歴史への関心が広まる機運が高まっていました。「近代化遺産ツアー 1 浦賀地区」は、そのような環境下で、各歴史的事項、各歴史遺産を個別にみるのではなく、総合的に捉え、都市形成過程と都市的特色を歩きながら体感的に理解できようとして、深い意味での楽しみを見出せるような行事とすることを目指して実施したものです。

【開催内容】

ここでは、行事の内容について、応募状況なども含め、見学当日のコースに沿って概略を説明します。

行事の定員は 30 名でしたが、申込者が定員を超過したため、抽選を実施しました。申込者数の多さは実績として評価されることが多いものの、学習したいという希望をもって往復はがきで応募してきた方々に選に漏れた旨の通知をするのは、何度行っても辛い業務となります。また、参加者は少なくとも充実した行事内容で良い効果をもたらすことができた実感できるイベントもあります。今回の「近代化遺産ツアー 1 浦賀」は、応募者数が多い中でも各参加者からの反響の良い中身の深い行事であったと捉えています。

行事の集合場所は京浜急行の浦賀駅。昭和 5 年に湘南電気鉄道の駅として開設されたもので、駅を降りて目の前には浦賀ドックの敷地が広がっています。行事では、住友重機械工業株式会社、および横須賀市役所市街地整備推進課の多大なる協力のもと、解体が計画されている戦前の工場建築周辺、明治 31 年建造の赤れんがのドライドックなどを敷地内から見学しました。ただし、行事の趣旨は歴史遺産を単品として見学するものでは無かったため、敷地の入り口に至るまでの道のりでも歴史的風景を鑑賞し、都市形成過程を体感できるよう、見学ポイントに向かって歩き始める前に、問題意識が高められるような解説を行った。浦賀ドックの敷地には、かつて浦賀屯営が置かれ、近代的な軍隊制度での兵隊教育の始まりを伝える重要な地でもあったため、その遺構がどこかに存在しないか、参加者とともに探して歩けるよう、当時の地図も配布資料に加えた。

旧浦賀ドックの敷地内の見学時間は、参加者の反響をみて調整するよう計画したが、行事開始から 1 時間 30 分後には次の目的地へ向かうことのみ事前に決めておきました。浦賀ドック内では、通常、20 分から 30 分程度で回れるようなコースを巡ったものの、敷地内の戦前の工場建築が解体されるというニュースが流れていたこともあってか、見学時間は 1 時間弱に及び、次の見学ポイントへ向かいました。浦賀ドック内の見学時間が短い場合には、浦賀地区内の商店や住宅などの和風建築と街並みを巡る計画でしたが、これを割愛して、浦賀奉行所について考えるコースに進むこととしました。

浦賀奉行所について考えるコースの主要目的地は、浦賀奉行所跡の発掘現場でした。発掘現場に向かう前に、浦賀奉行所のイメージが湧いた方が現場見学への興味や楽しみが増すであろうと考え、現場へ向かう途中、浦賀文化センターに立ち寄り、浦賀奉行所を再現したジオラマの展示や絵地図の展示を見学した。その予備知識を元に浦賀奉行所跡の発掘現場に到着すると、参加者は目を輝かせながら熱心に見学し、また、横須賀市役所の発掘担当者の説明に聞き入っていました。後半は、浦賀ドックの見学内容を忘れてしまうのではないかと心配になるほど、ほとんどの参加者が見学に熱中していました。当初、浦賀ドックの敷地を出るあたりが、名残惜しくなるポイントではないかと推測していましたが、その最たるポイントの座は浦賀奉行所の発掘現場という結果となりました。市民の地元の歴史への興味関心も、動機付け如何によって大きく変わってくるであろうことを感じさせる行事でもありました。

図版の紹介



▲① 明治時代の浦賀ドック

(横須賀市自然・人文博物館蔵・若村家寄贈)



▲② 建造中の浦賀ドックの1号船渠

(横須賀市自然・人文博物館蔵・若村家寄贈)

▲① 軍艦を修理している様子。

▲② ドックの奥側は現在、浦賀地区の幹線道路になっている。ドック建設が浦賀地区の都市形成にも大きな影響を与えていたことが一目でわかる写真である。

「旧横浜正金銀行本店本館 建物見学会（第2回）」

実施概要

主 催 神奈川県立歴史博物館
場 所 神奈川県立歴史博物館
開催日時 9月23日（月・祝）
①10:30～12:00 ②14:00～15:30
参加者数 ①25名 ②18名



教育イベント概要

【開催趣旨・目的】

1904（明治 37）年に完成し、当館の建物として保存活用している旧横浜正金銀行本店本館は、国の重要文化財・史跡に指定されており、横浜をそして日本を代表する近代建築の建物です。この建物見学会は、当館の歴史を見て聞いて知ることのできる貴重な機会であるとともに、参加者が学ぶ楽しさや発見する喜びを体験し、博物館を利用する楽しさを実感できること、当館に親しみをもち再度訪れたいと思うきっかけになることを期待して開催しています。

【開催内容】

世界三大為替銀行としてその名を馳せた横浜正金銀行の本店本館は、横浜赤レンガ倉庫や日本橋の設計にも関わった、明治時代を代表する建築家の妻木頼黄（つまきよりなか）が設計したものです。外壁に石材を利用した煉瓦造りで、ネオ・バロック様式とされる威厳ある外観のほか、通常非公開の地下の金庫扉や 1923（大正 12）年の関東大震災で焼失し改修工事で復元された屋上ドーム、銀行の面影を伝える貴重な遺構などの見どころについて、当館学芸員が詳しく解説しながら案内しました。

【実施（開催）時の会場の様子】

参加の皆さんは、学芸員の説明に耳を傾けながら、見学各所を見入ったり写真撮影をしていました。見学後のアンケートでは、参加者の満足度は高く、「満足」、「どちらかといえば満足」を合わせると 100%でした。「普段入れない場所を見学できてとても楽しかった。」、「すばらしい建造物をつぶさに見ることができた。」、「予備知識なく参加し、すべてが新鮮で面白かった。」、「丁寧な解説でわかりやすかった。」などの声が寄せられました。

開催時の様子



▲ 屋上での説明の様子



▲ ドームを飾る「ドルフィン」の装飾

担当者によるコメント

当館建物のシンボルである屋上ドーム、通称「エースのドーム」をはじめ、通常非公開の見どころをじっくり見学できることから、申込みが多く、毎年度4～5回開催している人気のある行事です。他の講座と比べて、当館への来館あるいは当館の行事参加が初めての方が多いのが特徴で、建物の魅力で参加者の関心をしっかり引き寄せることができるため、参加者の様子や反応を見ながら、担当学芸員として毎回楽しく解説しています。

実施団体の紹介

横浜のみなとみらい地区に隣接し、馬車道に面した当館は、コリント式の柱頭飾りをもつ大オーダーと、正面に据えられた巨大なドームが特徴です。この屋上ドームについては、年2回の無料観覧日（文化の日・春分の日）にも公開し、建物見学会と同様、多くの来館者から好評を得ています。

神奈川県立歴史博物館は、「かながわの文化と歴史」をテーマとして総合的に扱う唯一の博物館です。原始・古代から現代までの資料を、人々の生活や信仰、政治経済の変化、外来文化の影響などの様々な歴史的視点で常設展示するとともに、学芸員の研究成果等をもとに特別展などを開催しています。

また、特別展にあわせた講演会等の各種講座、参加体験型行事の開催、館内ミュージアムライブラリーでのレファレンス等を通じた情報提供のほか、学校と連携し、学校からの展示見学学習の受入れや、学芸員が学校に出向いて講義する出張講座も積極的に実施しています。

このような学びの機会の充実に加え、先人が遺してくれた文化財や美術・工芸品等の貴重な文化的資産を、県民共有の資産として次世代へ引き継ぐ重大な責務も担い、適切な保存・管理に努めています。

展開している博物館の様々な活動については、当館ホームページで紹介するとともに、当館キャラクター「パンチの守(かみ)」がツイッターで配信しています。

今後も、幅広い年齢層の県民をはじめ、本県を訪れる多くの方々を魅了するよう取り組んでいきます。



神奈川県立歴史博物館キャラクター「パンチの守」

ホームページ <http://ch.kanagawa-museum.jp/>
ツイッター https://twitter.com/kanagawa_museum